

氏名	間野龍 まのりゆう
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第144号
学位授与の日付	昭和55年5月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	明代文化史研究

論文調査委員 (主査) 教授 島田虔次 教授 萩原淳平 教授 谷川道雄

### 論文内容の要旨

本論文(『明代文化史研究』東洋史研究叢刊之三十一, 昭和54年)は, 明代の政治と社会, 宗教, 思想などがどのように関連して展開したか, 特に明代の儒教が仏教道教とともにどのように関連して動いていたか, また三教相互の混融とその変容, について検討しようと試みて, 著者が従来発表した論文を集成したものである。内容は, 一, 明実録の研究, 二, 明代の儒学と陽明学, 三, 明代の仏教と明朝, 四, 明代の道教と宦官, 五, 儒仏道三教の交渉, の五章より成り, 付録として蓬左文庫蔵, 林兆珂編『林子年譜』, 大阪外国語大学石浜文庫蔵『夏午尼経』(三一教主夏給持経など五種の総称), の二部を影印している。

第一章では, 明代史研究の基礎史料である明実録についての, 明末以来の中国における諸説, および二十世紀に入ってから中国日本ヨーロッパなどの諸説, を紹介かつ批判, 太祖実録以下十三朝の実録の編集過程, 編集体制(監修官, 総裁官, 纂修官などの任命方法, 事業のすすめ方, 完成後の上進の儀など), もともと宮中における正副二本のみで一般に公開されるものではないはずの実録が今日写本として30余種も存在している事実, などについての研究が展開され, 且つそれら写本の系統論や, 『明史』『起居注』『国権』などとの比較研究による実録の史料的価値の確定, がなされる。

第二章。宋学の重要作品たる真徳秀の『大学衍義』に対して丘濬の『大学衍義補』が著述されるに至った事情とその意義, 明代儒学のひとつの具現の場たる経筵, 日講などの行事の成立と変遷, ならびに弘治初年における寒暑進講可否論議の意味するところを論じ, 王陽明に対する封爵栄典の停止とその回復の事実をめぐって王陽明評価の変遷をのべ, 明代の家規, 家訓がそれ以前の家規家訓と性格を異にすることを指摘してそこに陽明学の影響や功過格思想との関連を見ようとする。ついで蘇州の芸術家, 文人たる祝允明の『祝子罪知録』の歴史人物評論が, 蘇州という土地における反政府的風気に依るとともに, 一方また, やがて陽明学において結晶するであろうような心的傾向の伸長しつつあった時代の産物でもあり, 李卓吾の出現の先駆現象として見らるべきことを論ずる。

第三章では, 明代の仏教を国家権力との関係から追究する。すなわち僧録司(および道録司)設置の経

緯、ならびにそれ以後の仏教とりしまり政策（瑜伽僧対策、度牒対策、田土財産管理の監督など）の変遷を論ずる。すなわち私度の禁止、寺院に対する制限、などの問題や、土木の変以後対北方政策や国内の災害対策などによる財政難、それを緩和せんとしての度牒の発売や僧官道官の納粟授官の出現、その他寺観の名額の賜与、などを指摘し、成化時代に入ると遂に売牒売官が出現、一般化すること、更には空名度牒の発売にまで到った事実を実録に依りつつ整然と叙述し、弘治時代の馬文升の改革案がこの流れを相当程度抑制したことを高く評価する。

第四章の主題は道教であるが、具体的には、道教の聖地武当山（太和山）の諸道観の造営と宮廷内宦官勢力との関係を論ずる。成祖が武当山に積極的に保護援助を加えた理由を、張三手に対する執心と玄武上帝に対する信仰にあるとし、最初は湖広布政司右参議の管轄下にあった武当山にやがて鎮守太監が配置されるようになった背景には武当山の榔梅などの進貢という事実があったこと、宦官勢力や内廷と武当山との結びつきが一層緊密化してゆく嘉靖時代に入ると、武当山の香銭を湖広の賑濟、軍余の月糧、にあてることがみとめられ、これに対する宦官の反撃があって結局武当山に存留と定められたいきさつと、その背景としての世宗の道教信仰、などがとりあげられている。外になお、著者が実際に視察した広東省仏山の「祖廟」についての報告と、明代宦官の恐怖政治を詳説した丁易『明代特務政治』への書評を付録する。

第五章は儒仏道三教の融合を論ずる。有名な金の李純甫『鳴道集説』の元末明初における刊行にさいしての黄潛の序が実は王禕の文であることを指摘し、更に空谷景隆の三教思想や祝允明の三教思想を論じているが、もっとも中心をなすものは三一教主林兆恩の研究である。すなわち、林氏についての代表的年譜である林兆珂の『林子年譜』盧文輝の『林子本行実録』によってその家系、生涯、弟子について述べ、ついで今日みられる『林子全集』などに収めるところの多くの著作を紹介、解説し、その年代を決定し、更に彼の三教思想の内容、陽明学との関連、三教帰儒の立場から「道一教三」を主張するにいたった点を追求した。ついでその教化活動や貧民救済などの社会活動を具体的に示し、それが「天地の間一不識字の村漢」、という自覚から発していることを指摘する。そのほか、林兆恩はやがてしばしば祠堂にまつられるようになったこと、その教流は福建のみならず、南京、徽州、衢州、松江など各地に伝ったこと、その歿後20年を経ると彼をモデルとして三教合一を説いた『三教開迷正演義』一百回なる小説すら出現したこと、しかもその影響は中国本土にとどまらず、シンガポールやマレーシアなど、東南アジア各地に無数の祠堂が建てられ、今日なお三一教として伝承されていること、などが語られている。

なお、付録として影印されている二部のうち、『林子年譜』は林兆恩の年譜のうち最も早く成立したものであり、『夏午尼経』はその一部にあたる「三教道統中一経」のみ林子全集に収められているが、この内のものと同一ではない、両部とも「世界の孤本」といってよいとしている。

#### 論文審査の結果の要旨

本論文は、明代史の根本史料たる実録をあつかった部分（いわば序論）と、儒仏道三教とその交渉、融合をあつかった部分（いわば本論）との二つの部分に分けて見ることができる。実録研究の部分は丹念綿密をきわめ、従来の諸学者の説を批判し、諸写本の系統化を試みた点など、注目に値いする成果といつてよいが、ここでは主として本論の部分について論評を加えることにしたい。

まず儒学（儒教）に関する諸篇においては、明代儒学の帰結をなすものとして陽明学を位置づけ、それを引照基準として諸問題を考察しようとする態度が顕著な底流をなしている点を指摘したい。明代の家規、家訓や、『祝子罪知録』を論じた箇所にもっとも明瞭にあらわれているこの方法は、従来諸家によって採られたものでは必ずしもないのである。この方法を採ることによって最後の三教交渉プロパーの研究までを包括的一貫的に論ずることができたのは本論文の顕著な寄与である。ただ『大学衍義補』や経筵進講を論じた部分が、儒学論への導入部の役割をなすはずにもかかわらず、接続がスムーズにしているとはいいたいがたいのは惜しまれる。

仏教についての諸篇は国家の仏教統制の研究に終始しており、道教に関する諸篇もいわば武当山のモノグラフとでも言うべきものであって、三教交渉・三教融合という窮極の主題から見る時は、物足りなさを感じしめるのは事実である。しかしそれは余りにすべてを窮極の主題にのみ関係づけて、窮屈に考えすぎるからかも知れない。それに、それぞれ独立した研究としては、きわめて精細であって、学界を裨益するところ多大である。殊に、史料として徹頭徹尾実録を駆使した点で、甚だ特徴がある。

本書の窮極主題を最もよく論じているのは、当然のことながら、第五章の「儒仏道三教の交渉」の部分であろう。本章における中心テーマたる林兆恩にしても、そのいわば前おきとして取りあげられた金の李純甫、明の僧景隆にしても、従来必ずしも研究がなかったわけではない。しかし本論文ではそれぞれについてこれまで見落されてきた点や版本の問題を検討して、新しく論点を提供している。殊に林兆恩に関しては、従来の諸研究をふまえた上で新たに総合的な考察を加えたものであって、明代思想史文化史研究に対する大きな貢献といえることができよう。その中心的部分は林兆恩の三教帰儒的三教合一説の具体的内容、それが基本的に王陽明・陽明学派と一致すること、その合一論の明末思想一般における決して孤立的でない位置、教化活動の実際、などを詳細に論じ最も生彩がある。

もちろん、本論文にも不十分と思われる点は少なくない。例えば、既に諸家が論じた点を繰返すまいとしたところから、叙述が不当に簡略化されて却って脈絡がつかみにくくなっている箇所が往々にして存在すること、『大学衍義補』についても思想的内容的な吟味が不十分であること、しばしば不注意による句読のあやまりが散見すること、などの諸点がそれである。しかし、それらは本書の価値を左右するものではない。

よって本論文は、文学博士の学位論文として価値あるものとみとめる。